

8. あなたは、安息の年を七たび、つまり、七年の七倍を数える。
安息の年の七たびは四十九年である。
9. あなたはその第七月の十日に角笛を鳴り響かせなければならない。
贖罪の日に、あなたがたの全土に角笛を鳴り響かせなければならない。
10. あなたがたは第五十年目を聖別し、国中のすべての住民に解放を宣言する。
これはあなたがたのヨベルの年である。
あなたがたはそれぞれ自分の所有地に帰り、それぞれ自分の家族のもとに帰らなければならない。
11. この第五十年目は、あなたがたのヨベルの年である。
種を蒔いてはならないし、落ち穂から生えたものを刈り入れてもならない。
また手入れをしなかったぶどうの木の実を集めてはならない。
12. これはヨベルの年であって、あなたがたには聖である。
あなたがたは畑の収穫物を食べなければならない。
13. このヨベルの年には、あなたがたは、それぞれ自分の所有地に帰らなければならない。
14. もし、あなたがたが、
隣人に土地を売るとか、隣人から買うとかするときは、互いに害を与えないようにしなさい。
15. ヨベルの後の年数にしたがって、
あなたの隣人から買い、収穫年数にしたがって、相手もあなたに売らなければならない。
16. 年数が多ければ、それに応じて、あなたはその買い値を増し、
年数が少なければ、それに応じて、その買い値を減らさなければならない。
彼があなたに売るのは収穫の回数だからである。
17. あなたがたは互いに害を与えてはならない。
あなたの神を恐れなさい。
わたしはあなたがたの神、主である。
18. あなたがたは、わたしのおきてを行ない、わたしの定めを守らなければならない。
それを行ないなさい。
安らかにその地に住みなさい。
19. その地が実を結ぶなら、あなたがたは満ち足りるまで食べ、安らかにそこに住むことができる。
21. あなたがたが、
『もし、種を蒔かず、また収穫も集めないのなら、
私たちは七年目に何を食べればよいのか。』と言うなら、
22. わたしは、六年目に、あなたがたのため、わたしの祝福を命じ、三年間のための収穫を生じさせる。

説教

レビ記25章では、7年に一度の安息年について(1~7)、さらには49年に一度のヨベルの年について(8~55)教えられています。

「ヨベルの年」の「ヨベル」とは、語源的にはラッパの響きから来たことばで、ヨベルの年を知らせる角笛そのものがヨベルで、それを鳴り響かせる年がヨベルの年です。ヨベルの年は安息年である7年の7倍、つまり49年目に訪れます。

8. あなたは、安息の年を七たび、つまり、七年の七倍を数える。

安息の年の七たびは四十九年である。

9. あなたはその第七月の十日に角笛を鳴り響かせなければならない。

贖罪の日に、あなたがたの全土に角笛を鳴り響かせなければならない。

安息年は七年に一度巡ってきますが、その安息年を七回目に迎える時が、より完全な安息の年を意味するヨベルの年となります。7回目の7年目の7番目の月の10日に迎える「贖罪の日」に、特別に角笛を全国津々浦々に吹き鳴らして、ヨベルの年が始まります。通常の年は、7番目の月の最初の日角笛が吹き鳴らされて、10日目の「贖罪の日」に備えをなすのですが、ヨベルの年には、第1日目に加えて10日目の「贖罪の日」にも吹き鳴らされて、身代わりのいけにえによるより完全な「贖い」「解放」が告げ知らされるのです。

ヨベルの年に於ける最大の恩恵は、売り払った自分の土地が無条件で戻り、売られた奴隷も同じく無条件で解放されるということです。

10. あなたがたは第五十年目を聖別し、国中のすべての住民に解放を宣言する。

これはあなたがたのヨベルの年である。

あなたがたはそれぞれ自分の所有地に帰り、それぞれ自分の家族のもとに帰らなければならない。

貧しくなっていよいよ最後に自分の土地を手放さなければならない時があります。そうなると、最後の財産である土地を売って小作に転じるか、あるいはそれを資金に外国に行ってそこで生活をしなければなりません。でも、たとえ貧しくなって他人に売り渡してしまった土地であっても、49年に一度巡ってくるヨベルの年には、土地は自分のところに返還されます。しかも、一銭もその代価を支払うことなく、全く無条件で返還されるのです。なぜなら、すべてのイスラエルの民の身代わりとなって屠られ殺されたいけにえが、血を流し、借金の代価を支払って、借金の落とし前をつけてくれたからです。このように、ヨベルの年には、言わば一切の借金が免除されるのです。それで、生活に困って売り払った土地は無条件で返還され、身売りした奴隷も無条件で解放されます。これは考えれば考えるほどすごいことです。借金がことごとく免除されるからです。どんなに貧乏で多額の借金を抱えていても、全額免除されるのです。土地を売り、遂には売物がなくて身売りする以外にないとしても、ヨベルの年にはすべてが免除され、解放されるのです。

「罪の赦し」を教える聖書ではありますが、「借金免除」という思想も聖書の律法には明確に記されているということも、私たちは明記しなければなりません。これは神を畏れるということがない限りあり得ないことですが、そういう思想が聖書には明確に記されています。

17. あなたがたは互いに害を与えてはならない。

あなたの神を恐れなさい。

わたしはあなたがたの神、主である。

36. 彼から利息も利得も取らないようにしなさい。

あなたの神を恐れなさい。

そうすればあなたの兄弟があなたのもとで生活できるようになる。

43. あなたは彼をしいたげてはならない。

あなたの神を恐れなさい。

私は、韓国に留学している時には、毎月3万円ずつ、教団から奨学金が送られてきました。でも、それは「貸与」となっていて、本当は返還しなければならないものですが、二年間教団の教師となってお礼奉公することで、免除されて助かります。でも、ヨベルの年の借金免除はそのようなお礼奉公も必要ありません。無条件で、全額免除されて、土地を返してもらえます。そして、その理由は、ただひとえに「贖罪の日」に屠られるいけにえの力によります。

そう考えると、イスラエルに於いては、土地の永久使用権というものは全く売買できないこととなります。たとえ土地を売買する場合があったとしても、それはあくまで最長49年間までであり、限定された期間の使用権利、いわば借地権が売買されるに過ぎません。それで、売買の値段もヨベルの年までの土地の使用期限に応じて決められることとなります(15~16)。

15. ヨベルの後の年数にしたがって、

あなたの隣人から買い、収穫年数にしたがって、相手もあなたに売らなければならない。

16. 年数が多ければ、それに応じて、あなたはその買い値を増し、

年数が少なければ、それに応じて、その買い値を減らさなければならない。

彼があなたに売るのは収穫の回数だからである。

ヨベルの年の翌年に売買されるならば、使用期間もたっぴり48年間あるため、高く売買されるでしょう。しかし、反対に、翌年がヨベルの年であるという場合には、僅か一年間しか使用期間がないため極めて安く、48年間の使用料の48分の1の値段で売買されることとなります。このことから理解できる聖書(レビ記)の極めて重要な思想は、イスラエルの土地の真の所有者は神さまである、ということです。

土地は生産手段で、人間の営利活動の基本となるものです。土地を十分に活用して人は利益を得、金儲けをして、より豊かになることを目指します。でも、人がより豊かな暮らしを求めて、どんなに土地をフル活用し、自分のだけでは足りないとばかりに他人の土地まで買いあさり、使用人を雇い、遂には奴隷までこき使って、生産量を上げて食欲に資本を増やしていったとしても、7年に一度の安息年(1~7)を迎えるごとに、さらには49年目のヨベルの年を迎えるごとに、奴隷を解放し、他人の土地を返還しながら、世界の真の支配者は神さまであることを思い出さなければなりません。そして、7年に一度土地を聖別して休めることにより、さらには49年に一度土地を聖別して返還することにより、土地は安息を回復して聖なるものとなり、真に人々にいのちを与えるものとなります。7年に一度土地を休ませ、49年に一度土地を返還することは一見無駄で損するようにも見えます。でも、実はそれこそが本当に人を生かす唯一のあり方であることがわかります。土地は永久に自分のものだという考えは、食欲に休まず働く自分を殺し、休まず働かせる使用人や奴隷を殺し、せつかく神さまが人の祝福のために与えてくださった土地を汚し、この世界に呪いと滅びをもたらす考えです。ですから、このような食欲な人間が神のさばきを受けて滅びる(ユダ王国が滅亡した)ことを、聖書は次のように表現します。「この荒れ果てた時代を通じて、この地は七十年が満ちるまで安息を得た。」(Ⅱ歴代誌 36:21)。悪い人間たちがいなくなって清々したとでもいうか、この世界をダメにして、汚して、腐敗させて、墮落させていた人間たちが、みな成敗され、滅ぼされて、安息を得た。きよさを取り戻した。人を生かす聖なるものに回復した。ということです。

土地は神さまのものであり、自分は、神さまから憐れみにより一時的に土地を借り、それを耕しながら生きることを許されている在留異国人に過ぎないと神さまに感謝する時、土地は聖なるものとなります。人を生かすものとなります。人に「安らかさ」をもたらすものとなります。

18. あなたがたは、わたしのおきてを行ない、わたしの定めを守らなければならない。

それを行ないなさい。

安らかにその地に住みなさい。

豊かな実りと、満ち足りた満足と、平安を人にもたらしものとなります。

19. その地が実を結ぶなら、あなたがたは満ち足りるまで食べ、安らかにそこに住むことができる。

そして、神さまが「祝福を命じ」、神さまの祝福をもたらすものとなるのです。

22. わたしは、六年目に、あなたがたのため、わたしの祝福を命じ、三年間のための収穫を生じさせる。

「すべては神さまのお恵みです。」こう告白して神さまに栄光を帰し、神さま感謝してみこころを行い、人が我がもの顔で支配して汚れたこの罪の世に「神の栄光」をあらわしたいと心から願います。